

盆棚と薬箱

救出した文化財から「歴史」を考える

An Obon Altar and a Medicine Chest:
Considering "History" from Rescued Cultural Assets

小池 淳一

KOIKE Jun'ichi

はじめに

① 盆棚

② 薬箱

おわりに

【論文要旨】

文化財レスキューによって救出・保全処置をおこなった資料はどのような可能性を持っているのだろうか。本稿はそれについて博物館展示、とりわけ、国立歴史民俗博物館における展示を対象に考察し、それらが示す「歴史」について述べる。ここでは宮城県気仙沼市小々汐のオオイ（尾形家）とその周辺から救出した資料をその事例としてとりあげる。まず、盆棚については時間の進行に伴って、臨時に設営される先祖祭祀の施設であるが、家屋内でも仏壇とは別の部屋で、神棚と連続するかたちで設営されることが注目される。さらにそこには位牌以外に茶牌など寺檀制度とは異なる経緯によって持ち込まれた先祖祭祀の表象が掲げられる。このことは盆棚が、単なる年中行事の構成物ではなく、オオイという家における先祖祭祀をめぐる「歴史」が埋め込まれている存在であることを示している。次いで薬箱はオオイのみならず小々汐における医薬事情を示す存在で、遠隔地から売薬商によってもたらされた薬を常備するものであった。尾形家における薬とそれに類する医療伝承を併せて考察すると、健康の維持のためにさまざまな情報が集積されていたことをうかがうことができる。それらは日常生活のなかではそれほど意識されていなかったものの、薬箱とそれが収められていた箱階段のなかに封じ込められていた。改めて薬箱を軸にその記憶を確認すると、オオイという家が前近代からのさまざまな医療に関する知識や媒体を積み重ねていく役割を果たしていたことが判明する。これは健全な日常を維持するという生存戦略の「歴史」が薬箱と関連する知識の存在に表出していることを示している。そしてそれは小々汐をはるかに超える東日本一帯に及ぶ広い地域との交流に基づくものであった。定住生活の骨格ともいえるイエの生存・維持のための情報蓄積は、長年にわたる人と情報の移動によって支えられてきた「歴史」の産物であることを示している。

【キーワード】 文化財レスキュー、博物館展示、先祖祭祀、売薬商、民間医療

はじめに

いわゆる文化財レスキューは多くの文化財を災害や事故による損傷・被害から救出し、整備・保存して後世へと伝えていく営みであるが、その過程は地道で粘り強い作業の連続である。時には単純作業が延々と続き、神経を磨り減らすことも少なくない。そうした作業のなかで従事する者の念頭に浮かぶのは、救出した資料にどのような意義があるのか、どういった価値や可能性を持っているのか、という疑問であろう。

実はこうした疑問は指定、未指定にこだわらず通常でも多くの文化財にまつわるものでもある。古くて貴重であることはわかるものの、どういった点で貴重であり、大切なのか、にわかには十全な説明を得ることは簡単ではない。博物館や歴史民俗資料館とそこでの展示はとりあえず、そうした疑問や問いかけに具体的に答える可能性を持つ施設であり、営みであることはいうまでもないであろう。救出することができた文化財を展示というかたちで位置づけることができれば、一定の意義を提示したことになる。しかし、それは容易なことではない。

本稿では東日本大震災で被災した宮城県気仙沼市小々汐地区におけるオオイ（尾形家）を中心としたレスキュー作業により保全した資料、いわゆる尾形家資料を取り上げて、その意義や価値、展示における意味について論述しようとするものである。救出された膨大な尾形家資料は、その数に見合う極めて多種多様な可能性を秘めているが、そのうちのごく一端について考察を試みたい。

その際に留意するのはモノから「歴史」を構築するという観点である。ここでモノというのは、いわゆる民具をはじめとする民俗資料群をさすが、なるべく広く生活にかかわる動産を包括的にさすこととしたい。「歴史」を構築するといった場合、一般にすぐ想起されるのは古文書や記録といった文字資料であろうが、ここでは意識的にそれらを扱わない。というのはそうした文字資料が時間軸のなかに位置づけられ、機械的に過去の生活や文化を表象するという可能性は、狭義の歴史学のなかで有効なものであって、被災地域において「歴史」を復元するという営みにとっては部分的なものであるためである。ここで「歴史」というのは、広義の歴史研究、すなわち過去の人間の営み総体をとらえ、さまざまな角度から甦らせる行為であり、知的な取り組みである。具体的には博物館や歴史民俗資料館といった施設・設備における展示を想定してもよいだろう。そうした広い意味での「歴史」を、救出した資料からどのように読みとるのが本稿の課題である。具体的には、盆棚の構成物、とりわけ「位牌の掛軸」とも呼ばれる日牌・茶牌類を、まず取り上げてみたい。次に薬箱を取り上げ、そこから読みとることができる地域の生活の「歴史」を考えてみたい。それぞれ、救出した資料の特徴や関連する情報をなるべく具体的に提示し、考察を加えた上で、現在、国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略記する。）の第4展示室（民俗）における位置づけや位置づけの可能性について論じていくこととしたい。そのなかで静態的にみえる展示物から生活の変遷や動態、すなわち広義の「歴史」を構築する可能性を考えてみたい。

①……………盆棚

まず盆棚, 特にその主要な構成物である位牌や茶牌, さらに盆棚そのものの構成とその意味について述べてみよう。これらは気仙沼市小々汐地区のオオイ（尾形家）を中心とする文化財レスキュー作業によって確保されたものを, 歴博の展示に用いている, いわば現用の災害関係の展示である。その背景と用いられているモノに表出している「歴史」について考えていきたい。

(1) 盆棚とその展示—循環する時間を展示する試み

2017 年現在, 歴博の第 4 室 (民俗) においては, 「くらしと技」というコーナーのなかの「くらしの場」という部分で, 尾形家住宅の一部を再現展示している【図 1 尾形家の平面概念図】。2013 年 3 月にオープンした 4 室展示は, 計画の当初から民家を取りあげ, 日本列島上の民俗のなかで「くらしの場」として展示する予定であった。筆者はその担当として東北の数ある旧家および民家建築のなかから, 気仙沼市小々汐のオオイ（大本家）である尾形家を選び, 同家を中心として伝承されてきた行事や儀礼を聞き取りおよび参与観察によって記録し, 展示に向けての資料にしようとしていた。

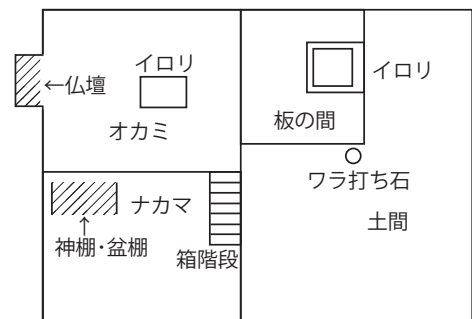


図1 復元した尾形家の平面概念図

尾形家の震災以前の位置づけを述べておくと, 気仙沼市の海沿い, 特に四ヶ浜と呼ばれる地域には集落に中心と目される旧家がある場合が多く, 尾形家もそうしたなかのひとつであった。しかし, 他の旧家とやや異なっていたのは, 屋根が茅葺きであり, 家屋も文化 7 年 (1810) の建築当時の姿を, 内部は改造が加えられていたものの, 外見はほぼそのまま, 残していたという点であった。内部も玄関を入ると土間が広がり, 土間から直接, 足を踏み入れることができる様式のイロリ（囲炉裏）のある板敷きの間が現役で使われていた。もちろん, イロリに薪が焚かれることは既になく, 上に机を据えたり, 炬燵として家族が使用していた。さらに奥にはザシキとナカマと呼ばれる畳敷きの部屋があり, そこも接客をはじめとする日常の暮らしのスペースとして現役であった。つまり 19 世紀に作られた家屋が, そのまま現役で利用されていたのであり, この旧家を舞台に積み重ねられてきた時間が空間のなかに息づいていた, といってよい。

そして何よりも重要なことは, 尾形家の人びとがそうした空間のなかで, 現代の暮らしを営み, 数々の年中行事を継承していたことである。そうした民俗空間としての時間的な厚みを現在進行形で感じることができ, 記録化も可能であったことが尾形家を展示の対象として選択した最大の理由であった。

しかし, そうした厚みを持ったイエの文化は, 東日本大震災, 具体的には小々汐地区を襲った津波が, 根こそぎ奪ってしまい, 連綿として続いてきた生活の時間が断ち切られてしまった。そして断ち切られた時間を再びつなぐ試みが, 第 4 室における再現展示であったということになる。

改めて、イエとは何か、という問いかけに戻って確認しておこう。それは民俗研究における分厚い蓄積をふり返るというよりも、展示から何を発信しようとしてきたのか、という意志としての意味あいである。イエは日常における生活・生産の場であるとともに先祖祭祀をはじめとする祭りの場であった。そこでは「ご先祖様」をはじめ、家の神や水神、火の神、厠神などの機能的に分化している多種多様な神霊が息づく空間でもある。生活空間の利用目的に即して確認するならば、生活・労働・祭祀が折り重なって展開される場であるということになる。

家屋空間のなかにはそうしたイエの機能を担う屋内施設が存在している。尾形家に即して言うならば、生活の側面からは、例えば煮炊きと照明、暖房の役割を果たすイロリ、労働の側面を示す土間とわら打ち石といった具合である。そして祭祀の側面を担うのは仏壇であろう。それ以外にも神棚がナカマに半ば屋根裏に接するような独特の高さに設けられていたり、板の間の天井近くにもその年の月の数だけ、幣束が差されていたりする。

イエの祭祀を考える場合に常設の施設だけではなく、季節の進行、時間の推移とともに作られ、利用されるものにも注意しなくてはならない。尾形家では盆棚と「お年神様」(歳神)がそれにあたる。イエのなかで流れる時間とそれにとまって、一定の時節に組み立てられ、意識されるこれらの設えがあってようやく祭祀空間としてのイエを示すことができるのである。

民俗研究で時間を取り扱う場合には、歴史研究のように不可逆的なものとして扱うのではなく、循環し、あたかも円を描くようにして、生活のなかでくり返し訪れるものとしてとらえる必要がある⁽¹⁾。そしてその流れに沿って生活の場が祭祀の場となる。歴博では尾形家の再現展示をおこなうなかで、実際に家族が生活している感覚を少しでも活かし、上述した祭祀空間としてのイエを表現しようとする意図のもとに毎年、7月から9月にかけて盆棚をナカマに作り、仏壇の位牌を移して、盆行事が行われている様相を再現するようにしている。季節の進行によって展示を変化させているのである。

このことによって、生活の場としての民家が時間の経過、季節の推移によって変化するものであること、そしてそうした行事の舞台となることで、「歴史」が刻まれていくことを示すことをめざしている。それは先祖祭祀の設えの造作、祭祀の場の移動によって表現されるとともに、盆棚に設営されるさまざまなモノによっても提示されることになる。次に盆棚の細部とその位置、組み立ての意味する点について述べてみよう。

(2) 盆棚の意味と構成

盆棚は仏壇とともにイエにおける先祖祭祀のシンボルであり、常設の仏壇が一般化する以前の祖霊をどのように祀ってきたかをうかがう重要な材料である。従って盆行事研究のなかで、盆棚の形状や設営の場所については注意が払われ、検討が加えられてきた。そこでは、祖霊以外のさまざまな精霊への祭祀も行われ、盆行事と盆棚での儀礼が祖霊化にとっての必要不可欠なものとしてとらえられてきている⁽²⁾。ただし、こうした盆の儀礼は正月行事などと同じく、基本的にはイエ単位のものであるために、地域性や同族間の差異などを論じることは実は意外に難しく、個々の家単位での事例の集積と分析が行われる傾向にあることには注意を払っておくべきかもしれない。そのことはイエごとの「歴史」の違いが反映されていることにつながっているかもしれない、またそうした差異

を社会組織や先祖伝承と重ね合わせながら考察していく必要も示唆しているといえる。ここでもあくまでも尾形家という小々汐地区の大本家（オオイ）の事例として掘り下げていくこととしたい。

先述したように、尾形家も盆行事は仏壇のある座敷ではなく、神棚のあるナカマで行われる。盆棚は座敷の仏壇から位牌を移し、神棚の下に盆棚を作ることと始められる。ナカマは縁側に接しており、庭を見渡せる位置にあることに注意すべきであろう【写真1 尾形家の盆棚】。

尾形家の神棚はナカマの天井より上の、通常であれば天井裏の高さに作られており、そこに幣束や恵比寿大黒の木像などが置かれている。その下に盆棚を用意することは、通常は仏壇に祀っている先祖を、盆の時期にはカミに近いものとして扱うという含意があるようにも思われ興味深い。それを印象づけるのは、盆棚の上部に仏壇から移されて並べられる位牌の数々であり、イエの死者の祖霊化の過程が盆棚に表現されているという、いささかうがった解釈をも可能にする。

一方、多くの盆棚研究が注意してきた「ご先祖様」ではない精霊の類の祭祀は、一段下がった、しかも盆棚の後方に隠されるように準備される供物に加えて、水とミソハギ、盆舟が置かれることから看取することができる。尾形家では特にこの設えに関する伝承はないが、盆棚には欠かすことのできないものとして意識されており、盆における精霊祭祀は継承されてきたといえることができる。

尾形家の盆棚は、以上のような祖霊化をめざす「ご先祖様」が位牌のかたちで、その置かれる場所とともに一定の存在を主張しているのに加えて、影の部分に精霊祭祀の空間もあり、日本各地の盆棚と共通する性格を帯びていることが理解できる。それとともに、「ご先祖様」の下ではあるが盆棚の正面に飾られる掛け軸にも注目すべきであろう。現在の歴博の展示では6本の掛け軸を上部に渡した縄に掛け軸の紐を括りつけるかたちで下げることにしており、これは当然のことながら震災で亡失する以前の尾形家の盆棚の設えを踏襲、模倣しており、尾形家の盆棚としては「ご先祖様」、



写真1 尾形家の盆棚 (2010年8月12日撮影)

すなわち祖霊とともに欠かすことのできないものということができる。

これらは十三仏のように死者を浄土へと導く仏や観音のようにさまざまな姿に変化して衆生の願いを叶える仏が盆の時期に改めて意識されるという面がある。しかし、それに加えて、茶牌や日牌、月牌などと呼ばれ、あるいは「位牌の掛軸」⁽⁴⁾とも呼ばれるものが重要な意味を持っていることに注意したいのである。次項では、こうした盆の時期にだけ掲げられ、盆棚の正面に掲げられるモノの語る「歴史」について考えてみたい。

(3) 日牌・茶牌とその意義

尾形家資料のなかの日牌・茶牌の具体的なデータを示しておこう。当該資料は、寛政10(1798)年、昭和43(1968)年、年不詳の3点である。

まず、寛政10年のものは、タテ60.0センチ、横20.9センチで、「茶盃建主證文／梵字(胎藏界・大日如来)為父 逆修／於高野山金剛峯寺蓮華谷五大院道場建立焉／寛政十年天三月三日 法印長意／尾形弥惣右衛門殿」と書かれている。全体が刷られたものに、日付・宛名の部分が墨書されている。また2行目は位牌のようなかたちで囲まれており、父だけが墨書されている(【写真2】、参照)。

昭和43年のものも刷られたものに、墨書で尾形家に対応する情報が書き込まれている。大きさはタテ72.0センチ、横26.0センチで、「日牌之契證／夫高野山者八葉法爾之奇岳三鈷到着之密利也粵篤信檀主喜捨淨財營建日牌／因茲勤修瑜伽三密之法薏然則過去淑靈速進五智性德之蓮臺矣且以事理

日供／永期龍華之曉大師知見必成二世之悉地而已仍支證報契如件」と高野山と日牌の由来・意義について記されている。次いで位牌状の多色刷りの枠のなかに「尾形家先祖代々之位／無縁佛」と書き込まれ、供養の対象が示されている。日付は「昭和四十三年十一月六日建立／施主尾形忠行殿」とあり、「高野山 宝成院」と記されている。

年不詳のものも位牌状の枠のなかに「尾形家先祖代々之精霊」と書かれ、左に「曹洞宗大本山」、右に「永平寺総祠堂」、下に「回向證」とあり、さらにその下に「尾形忠行家」とある。大きさはタテ74.0センチ、横20.8センチで、昭和43年のものと同じく、尾形家の先代、忠行氏が受けたものであることが判明する。

こうした先祖供養が目的であるこ

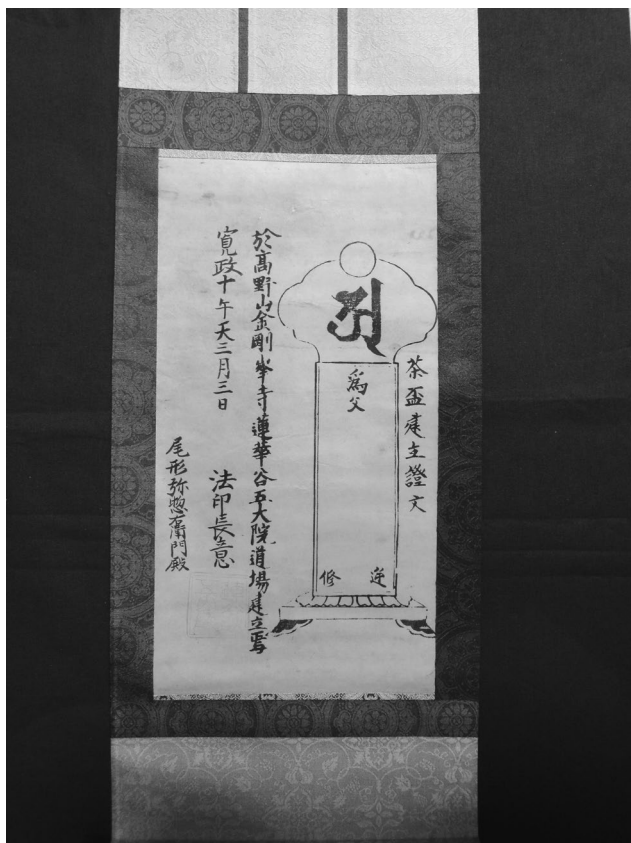


写真2 尾形家 茶牌 寛政10年(1798)

とが明確に読み取れるもの以外にも盆棚に下げられる掛け軸がある。「宇曾利山開基／慈覚大師自形自作」と書かれた僧形座像が描かれたものはおそらく、青森県下北半島の恐山で頒けられたもので、僧形の人物は縁起上で恐山を開いたとされる慈覚大師円仁であろう。さらに先にもふれたように「観音妙智力／（梵字七文字）／□（施か）□（救か）世間苦」の下に観音像が描かれている掛け軸があり、その下部には「鹿折 興福禪寺」とあることから尾形家の菩提寺である興福寺から出されたものであることがわかる。さらに出処などは不明であるが小さな十三仏の掛け軸もあり、盆棚の中段正面は賑やかな景色となっている。

盆行事の研究が盛んな中で、こうした日牌類に関する検討はそれほど多くはない。管見の範囲では、民俗学の長沢利明による考察の他に、近世宗教史の立場からの村上弘子の研究を挙げることができる。長沢は関東各地や山梨県下の具体的な事例にもとづいて、これらが高野山内の宿坊寺院に信徒が一定の金銭を納めるのと引き換えに与えられるものであること、高野山以外にも善光寺や出羽三山などでも類似の活動がおこなわれていることを指摘している。そしてその基盤には高野山奥の院への納骨の習俗があることを述べている⁽⁵⁾。近世になると広く庶民にも開かれ、遠隔地からの参詣とそれに伴う先祖供養の祈願に広域の信仰圏を持つ寺院が応じていく活動の一端にこうした日牌類を位置づけることができる。

村上の研究は、高野山内の寺院が関東をはじめとする各地のムラにおいてどのような宗教的な関係を結んでいたかについて、「過去帳」「供養帳」などと題された史料からうかがうものである。そのなかで中世末から近世にかけて、追善供養のみならず現世における安寧を祈願する逆修供養も増加していくことが指摘されている。「この世の浄土」としても喧伝された高野山と結縁することが貴族や武士だけではなく、庶民にまで広く浸透し、高野山内の諸寺院がそうした要求に広く応えていたことを明らかにしており、こうした高野山での供養祈願の増加からは近世における庶民階層のイエの確立や、比較的経済的な負担の小さい茶牌による供養の拡大を読みとることができる⁽⁶⁾。

こうした日牌類に関する研究をふまえて改めて、尾形家の盆棚について考えてみよう。これらは位牌と形状もそれを発行する宗教施設（寺院）も異なるものの、位牌と同じく先祖祭祀の表象であり、オオイというイエが祭祀の空間であったことを示している。盆という限られた時期にだけ、掲げられ、意識されるものではあるが、その際には盆棚の正面に吊り下げられ、視覚的には中心を占める。位牌と並んで盆棚の重要な構成要素といっていよう。

位牌がイエの先祖祭祀の表象として、日常的にも仏壇に飾られていることは、先祖を祀るという行為が檀那寺の関与によって成り立っていることを端的に示しており、そこからは近世以来の寺壇制度がイエの中にまで浸透し、維持されていることをうかがうことができる。一方、日牌類は仏壇に常に掲げられているわけではないが、先祖を意識する盆の時期には必ず持ち出され、盆棚の正面に掲げられる。イエの代々の当主をはじめとする構成員は、日牌類によっても、イエの先祖を祀ってきたのである。このことはイエの先祖祭祀という極めて普遍的な習俗が、近世に成立、普遍化した檀那寺による宗教的な処遇以外にも高野山、永平寺、さらには恐山といった著名寺院、霊山における供養によっても支えられていたことを示している。先祖祭祀はムラとその近隣の寺院だけではなく、広範な地域との交流によって支えられてきたのである。盆棚の日牌類は、先祖祭祀のためにイエの生者が旅をし、遠隔地の寺院の宗教的な力も取り入れていたことを示すもののなのである。

盆棚のしつらは実はこうした檀那寺以外の仏教寺院・仏教者による死者（先祖）祭祀の「歴史」が表現されていると捉えることができる。盆棚の上部に据えられる位牌と前面に掲げられる日牌類は同じ先祖祭祀を目標とする象徴であるとともに、異なる宗教勢力によって先祖祭祀が編み上げられていることを端的に示すものなのである。このことはイエにおける先祖祭祀の現様がいくつもの寺院とそこにおける供養によって生み出されてきた一種の歴史過程を反映しているといっていよう。盆棚はこうした「歴史」が表出したモノなのである。

思想史の安丸良夫は、民俗、特に広義の宗教的なものにおいて、地域と国家との対抗がその最も具体的な核心ではないか、と述べ、文化の「戦場」としての民俗という視点を提示している⁽⁷⁾。この点を意識すれば、まさに盆棚こそが、さまざまな宗教実践が拮抗するイエの中の時空であり、先祖を祭祀するというイエの根幹にかかわる宗教民俗における「戦場」なのであった。そしてこうしたかたちで、イエの「歴史」が表出する機構が組み込まれているのである。

②……………薬箱

次に薬箱とその周辺の事項を取り上げ、そこから、尾形家を中心とする小々汐の医療・薬事環境を検討し、健康的な日常を維持するための情報流通を読みとってみたい。これらは直接、歴博の展示がなされているわけではないが、第4室の展示のなかでも位置づけが可能なモノである。また関連する情報を整理、意識することで、モノから「歴史」的な動態を考えるためには適切なものと思われる。以下、具体的に述べてみたい。

(1) イエから職へ

4室展示では、定住生活の中核であり、その最も具体的な表象といえる民家の再現展示に続いて「職の世界」が置かれている。このコーナーのテーマである「くらしと技」の後半部分にあたるものと表面的にはとらえられるだろう。ただし、定住に対して移動というコンセプトを意識し、それを端的に示すために、移動を可能にする、もしくは移動を前提とする職人の技の世界を提示したという点に注意を喚起しておきたい。

もちろん、さまざまな職人の生活は居職ということばが示すように、定住することが重要であり、またそれによって技術の保持や顧客との恒常的な関係作り、流通のなかの位置づけといった状況を作り出す面も持っている。ただし、農耕などと比べると、さらに民家のような不動産に集約される生活環境と比べても、職人の生活とその技術は移動が容易であるといえるのではないだろうか。

また日本列島における農耕を軸とした定住の積み重ねが地縁関係による地域生活を育み、血縁と並んで社会的な慣習の重点であることは言うまでもない。その一方で、職や技の習得過程や同業意識、相互交流などが人と人との縁故を築いていくことも少なくない。これについては血縁や地縁⁽⁸⁾にならって職縁とでもいうべき人間関係、社会紐帯を指摘することができる。4室の尾形家は民俗的な社会関係に即しているならば、地縁・血縁を象徴する展示であり、続けて職人の世界によって職縁を示そうとしているともいえる。その「職の世界」の冒頭には置き薬⁽⁹⁾を展示している。これは尾形家、それも文化財レスキューで見出され、保全されたものではないが、実は小々汐のオオイをは

じめ数軒の家からも置き薬は発見されている。そのことを意識した資料の配列であることをここでは主張しておきたい。

(2) 薬箱とその背景

東日本大震災後の小々汐地区における文化財レスキューから見出された薬箱は以下の3点である。

まず第1のものは縦28.2×横19.8×高9.4（センチ、以下同）、蓋に「越中高岡／御薬入／小西武□」と墨書がある。富山県高岡からの売薬商がもたらしたものであろう。第2のものは大きさ24.6×22.1×13.0、上部に「御薬品々入／富山県新湊市殿町／AS（仮名）／電話（新湊）四三八五番」、引出し側面に「ケロリン／かぜ□／A（仮名）」と墨書されている。第1のものと同じく富山県の新湊から来ていた売薬商が置いていったものと思われる。第3のものは大きさ25.6×20.9×9.8で、蓋に「富山県上市町／御薬品々入／富国薬業株式会社」側面に「道正庵」「行商員M（仮名）」と墨書されている。これも富山からの売薬商のものであることが明らかである。

これらの資料から見ると、小々汐地区では富山からの各戸に薬を置き、使用した分だけの代金を後で払うという置き薬が浸透していたことがわかる。オオイをはじめとする小々汐の暮らしの中の健康維持はこうした富山方面との交流によって支えられていたのである。オオイではこうした置き薬をナカマの箱階段の引き出しに入れていた。

富山から三陸沿岸への売薬商の活動については遠藤和子の『富山の薬売り』に戦後の商いの様相を中心とした記述がある。それによると昭和23年当時、富山市から岩手県の内陸、東磐井郡摺沢町まで1泊2日、21時間以上の行程であったという。内陸の摺沢から沿岸部にさらに販売路を拡張していく過程は、1軒ごとに相手の事情を勘案し、気持ちよく受け入れてもらうための気配りの連続であった。特にそれぞれの土地における生業や生活のリズムをふまえて回商することは、地域を丸ごと理解していなければ不可能で、風土や生活感覚の相異を乗り越える営みであった。

遠藤の記述によれば、摺沢への回商時期は毎年11、12月で、当時この地域では葉タバコの生産が生業の中心であったが、それ以前にも炭や畑作による収入があることから、この時期が選ばれた。薬の入れ替え時には最も神経を使い、丁寧な説明を心がけた。方言を簡単に理解できないなどの障壁もあったが、気遣いを積み重ねることで乗り越えることができると実地で先輩たちから教えられたものだという。

やがて、内陸の摺沢における回商に先行する場所として沿岸部の気仙沼が選ばれた。気仙沼の水揚げは7月から12月が多く、ちょうど摺沢と連続して回商するには適していたのである。交通の便の良いところに宿泊場所を確保し、あらかじめチラシや新聞の折り込み広告などで宣伝した上で各戸に訪問を開始した。当時、全国から船が集まる気仙沼は「東北の上海」と呼ばれ、言葉（方言）の障壁はなかったが、得意先の新規開拓は決して容易ではなかった。得意先に喜ばれるように細かく気を配り、信頼関係を少しずつ作り上げることで、商売を成立させるようにしていった。⁽¹⁰⁾

こうした薬箱に関して、受け入れた側にはどのような記憶が残っているだろうか。小々汐地区オオイの尾形家当主の尾形健氏は次のような記憶を述べられた。

六〇年以上前までは毎年十一月から十二月あたりになると富山のASという薬商がやってきて尾形家（オオイ）に一泊し、小々汐とその近隣を一軒一軒回って常備薬を確認し、集金に歩

いた。オオイではナカマにASを泊めた。オオイでも薬代を払う一方で、宿代はもらわずに、食事まで世話していた。彼を泊めると一晩中、薬を整理したり、帳簿をつけたりしているのか、ガサゴソと物音がしていたともいう。御礼に紙風船を四、五枚置いていった。昭和三十二年の富山県新湊市小杉町 AS 薬房、と記された領収書も見出されている。ASは行李籠を重ねてそれを風呂敷で包んで背負ってきた。健脚でリズム良く歩くという印象があった。また小々汐ではアカダマやロクシンガンと呼ぶ腹の薬をよく飲んだことが記憶に残っている⁽¹¹⁾。

なお、尾形家に伝来した古文書の中に「薬かし方覚帳」（元治2・1865年）があり、そこには元治2年に4件、翌年は22件の記載がある。薬の名と人名だけの簡単な記録であるが、オオイから集落（同族）へ薬を貸し与えていたものと思われる⁽¹²⁾。

なお、気仙沼一帯では売薬商は富山のものに限られていたわけではなく、奈良県葛城市に本社のある足高薬房の出張所が赤岩に置かれており、現在でも盛んに商いをしている。尾形家でも松岩地区ではこの足高薬房が販売する「三光丸」がよく用いられていたことが記憶されている。また隣接する鹿折地区には仁泉堂（じんせんどう）という薬屋があり、気仙沼市の山友薬局も先代の忠行氏の友人であったので付き合いがあったという。同じく、忠行氏の部隊の軍医であった大友病院が魚市場北棧橋の向かい側にあり、そこには舟（カッコブネ）⁽¹³⁾で出かけていた。

以上の聞き書きなどから判明するのは、地域における薬をはじめとする健康維持のための情報や流通の多層性である。すなわち、さまざまな立場や社会関係を利用して、この地区の健康は維持され、それらは柔軟に組み合わせられていた。富山の売薬商の回顧からうかがえる地域への認識とアプローチとはまた異なる地域の論理や物流があり、地域における医療環境はこうした相互の組み合わせによって生み出されていたのである。

そうしたことが自体が一種の生活の動態であり、「歴史」であったということが出来る。地域だけでは完結しない、広域の交流が尾形家の薬箱には象徴的に集約されているのである。それと同時に医療という観点からすると、近代的な医薬品や治療とは異なる健康維持の心とモノとがあったことも見逃せない。次にその点について述べてみたい。

（3）民間医療とのつながり

オオイでは薬箱は前述したようにナカマの階段箆笥の一番上に入れていた。東日本大震災直前には置き薬を利用することはほとんどなくなっていたため、この空間も半ば忘れられた存在であった。しかし、ここには置き薬以外にも、近所で採れた民間薬も一緒に入れられており、オオイでは医療関係のモノが保管される場所ともなっていた。記憶にある主要なモノは以下の通りである。

イノハナ マイタケのようなかたちをしたキノコで、雑木林に生える。肌荒れ、ひび割れに効く。

煎じたお湯に手を入れる。食べても美味しい。

タラッポ タラの木の芽。糖尿病に効く。木を切って皮をむいて細かくして煎じて飲む。

トリトマラス 山に生えているが、畑の近くにも植えてあった。細かく切って乾燥させておく。煎じて飲む。

栗の殻 薬ではないが、正月三が日の間、毎朝、下の囲炉裏で燃やすことになっていた。そのために乾かしてためておいた。⁽¹⁴⁾

他にレスキューできたものとしては、熊の胆や福島県相馬地方の中村神社の護符（「馬の薬」と

記されていた)【写真3, 参照】などがある。熊の胆は日本においては狩猟者が熊から得る最も重要な「獲物」であり、それが小々汐に存在するのは、売薬商がもたらす薬の招来とは別のネットワークの存在が想定できる。中村神社の護符も民俗信仰と家畜の医療との境界に属するモノであり、家畜の健康という利益を喧伝する宗教的職能者の活動やオオイの構成員の旅などが予測できる。これらが置き薬と連続、類似するモノとして処遇されていたのである。

つまり、薬箱が格納されていた箱階段という空間は薬箱だけが置かれていたわけではなく、日常

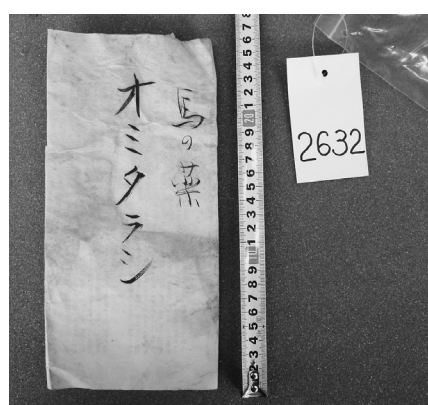


写真3-1 馬の薬(袋)

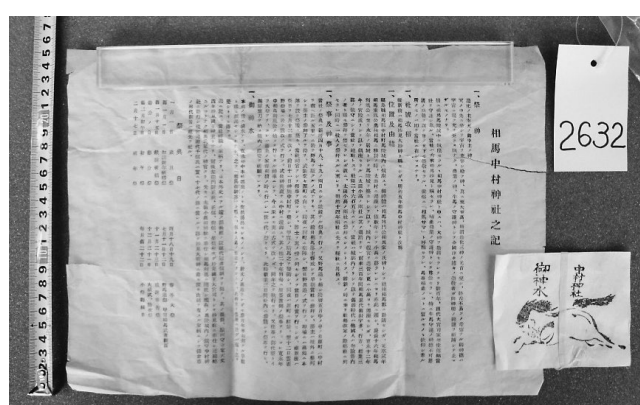


写真3-2 馬の薬(中身)

生活における投薬、健康維持、健全な生活といった文脈に連なるものがしまわれていたのであった。イエが生活の空間であり、根拠であるというのは民俗学におけるイエ理解の根幹であり、改めて言挙げするようなことではない。しかし、こうした一定の空間を占有する生活の文脈をひとつひとつ取り上げて、その来歴や構成の特色を探ることはもっと注意されてよいことだろう。

オオイのナカマの箱階段の中という空間は、ふだんはそれほど意識されないながらも、日常生活の健全性が危機に向かうときには、想起され、取り出されるモノが集積されていた。そしてそうしたモノの集積こそがイエを維持してきた地域の交流の結果でもある。イエ全体の「歴史」はこうした箱階段の中から、健康の維持や医療という切り口によって表出するのである。

民間医療については、さらに微細に薬箱などの中身として注目しておきたいものがある。それはいわゆる頓服薬の袋に描かれていた食べ合わせの知識である【写真4, 参照】。ここには「うなぎとうめぼし」「そばとくじら」「きのこことあさり」「あづきとびわ」などといった食べ合わせの禁忌が、現在でも広く知られている「すいかとてんぷら」などとともてに図示されている。これらの医学的な根拠は慎重に検討されなければならないが、頓服薬そのものだけにとどまらず、袋の意匠にも健康維持のための情報が記載され、それが広がる可能性を持っていたのである。

売薬商の扱う薬袋にこうした知識が記載されていたことから、いわゆる「民俗医療」と呼ばれるジャンルの知識は意外に広く、かつ近代的なネットワークに支えられていた可能性があるといえよう。つまり伝統的な地域の生活経験に基づいて形成され、継承されてきたと考えられがちな医療的な伝承も実は、意外に広域の人的あるいはモノに付随したかたちでの交流によって形成され、意識されてきたのかもしれないのである。その点からすれば、地域生活における伝承と広域の交流とは、健康を維持するために自在に用いられてきた情報源でもあったといえよう。



写真4 頓服薬の袋に記された食べ合わせの禁忌

薬箱に象徴されるオオイというイエは、集落とその近隣において保健センター的な機能を果たしていた可能性があり、それを可能にしていたのは売薬商人との付き合い、民間薬の蓄積、薬局との交際などであった。さらに売薬商人との付き合いから病気を防ぐ知識が流入しており、どの程度、実生活に浸透していたかは不明であるものの、新たな「民俗医療」を生み出す可能性もあったと思われる。

こうした集落における尾形家の機能を支えていたのは、三陸を遙かに超えた東日本全体の人びとの交流であり、知識のネットワークであった。薬箱を視点にすると小々汐が開かれた生活圏であったことが了解できる。これは尾形家の漁業や教育などから描き出せる交

流の問題と重層的かつ相互補完的なものであろうと予想できる。

おわりに

文化財レスキューによって救出・保全処置をおこなった資料がどのような可能性を持つのかについて、本稿では盆棚と薬箱という二つの資料に絞って考察を試みた。ここで述べてきたことを再度、確認し、併せて今後の課題についてもふれてまとめとしたい。

最初にとりあげた盆棚は季節の進行、時間の推移に伴って、臨時に設営される先祖祭祀の施設である。イエとしては祭祀的な側面を象徴するが、とりわけ仏壇とは別の部屋で、神棚と連続するかたちで設営されることが注目される。さらにそこには位牌以外に茶牌など寺檀制度とは異なる経緯によって持ち込まれた先祖祭祀の表象が掲げられる。このことは盆棚が単なる年中行事の構成物ではなく、オオイという家における先祖祭祀をめぐる「歴史」が埋め込まれている存在であることを示している。

盆棚には近世から近代にかけてのイエの構成員による先祖に対する祭祀意識がモノのかたちで残されており、結晶しているといえる。そこにはイエに連なる人びとの記憶が先祖祭祀という行為を通して反復、継承されてきたことが確認できる。そうした記憶や想起を「歴史」として意識化し、展示というかたちで表現することを可能とする点でレスキューされた文化財は大きな意味を持つのである。

次いで薬箱はオオイのみならず小々汐における医薬事情、医療環境を示す存在で、遠隔地から売薬商によってもたらされた薬を常備するものであった。それにとどまらず、関連する医療伝承を併せて考察すると、健康の維持のためにさまざまな情報が薬箱とそれが格納されていた箱階段に集積されていたことをうかがえる。それらは日常生活のなかではそれほど意識されていなかったものの、薬箱とそれが収められていた箱階段のなかに封じ込められるかたちで維持されていた。

改めて薬箱を軸にその記憶を確認すると、オオイという家が前近代からのさまざまな医療に関する知識や媒体を積み重ねていく役割を果たしていたことが判明する。これは健全な日常を維持するという生存戦略の「歴史」が薬箱と関連する知識の存在によって貫かれていたことを示している。そしてそれは小々汐をはるかに超える東日本一帯に及ぶ広い地域との交流に基づくものであった。定住生活の骨格ともいえるイエの生存・維持のための情報蓄積は、長年にわたる人と情報の移動によって支えられてきた「歴史」の産物であることを示している。

本稿ではいわゆる文化財レスキューで発見、救出したモノに出発して、「歴史」すなわち一種の、生活史・民俗文化史を描くことを目標に資料の紹介とその位置づけ、意義について述べてきた。静態的にみえる民俗展示を構成する資料も、個々の資料の特性や相互比較、生活上の位置づけ、宗教史的あるいは交流史的視点に着目することによって広義の「歴史」を構築することができることをここでは示した。もちろん冒頭でも述べたようにここで取り上げた資料は、救出した膨大な資料のうちのごく一端に過ぎない。引き続き、他の資料についても考察を試みていきたいと考えている。また、ここで試みた分析を異なる角度からも検証していきたい。さらにこうした議論をふまえて、小々汐や三陸沿岸を越えた交流史を描く可能性があることも登録しておきたい。御批正を仰ぐことができれば幸甚である。

註

- (1)——この点については拙稿「日本民俗の時間観—陰陽道の民俗的展開を中心として—」(『HERITEX』1号, 2015年, 名古屋大学文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター), 拙著『季節のなかの神々—歳時民俗考—』(春秋社, 2015年), 198-199頁などを参照。また、尾形家の盆行事全体については、拙稿「東日本大震災と文化資源—宮城県気仙沼市小々汐地区から—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集, 2014年)で報告し、若干の分析を加えているので参照されたい。
- (2)——代表的なものとして柳田國男『先祖の話』(1945年, 『柳田國男全集』(第15巻), 1998年, 筑摩書房, 所収), 高谷重夫『盆行事の民俗学的研究』(1995年, 岩田書院), 小松(喜多村)理子「盆棚」(『民具マンスリー』9巻11号~10巻1号, 1975年)などを挙げることができる。多様な盆研究の視点を総括したものとしては喜多村理子「盆と節供」(赤田光男・福田アジオ編『講座日本の民俗学6・時間の民俗』, 1998年, 雄山閣出版)を参照。
- (3)——こうした、いわゆる「無縁仏」と大まかに呼ばれる存在への祭祀については大島建彦編『無縁仏』(岩崎美術社, 1988年)によって概観を知ることができる。
- (4)——この語は長沢利明の論で用いられている。長沢利明「位牌の掛軸」(『西郊民俗』178号, 2002年), 参照。
- (5)——前掲注(4), 参照。
- (6)——村上弘子『高野山信仰の成立と展開』(2009年,

- 雄山閣), 特に第5章「供養帳にみる高野山信仰の展開」(217-287頁)を参照。
- (7)——安丸良夫「文化の戦場としての民俗」(『〈方法〉としての思想史』, 1996年, 校倉書房)。
- (8)——この点については拙稿「職と技の民俗史—道具を視座に—」(拙編『現代社会と民俗文化』, 2015年, 岩田書院), 参照。
- (9)——なお, 4室においていわゆるムラ(村)を正面から取り上げる展示資料を欠くのは, 展示の現代性を意識し, ムラを基盤とする民俗世界は現代においては微弱なものであるという認識に基づいている。うっかり欠落させたのではなく, 意識的な欠如であることを述べておく。
- (10)——遠藤和子『富山の薬売り』(1993年, サイマル出版会), 255-297頁。なお, いわゆる「富山の置き薬」については, 玉川しんめい『反魂丹の文化史—越中富山の薬売り—』(1979年, 晶文社), 高井進監修『富山の売薬文化と薬種商』(1986年, 富山県民会館), 植村元覚ほか編『富山県薬業史通史』(1988年, 富山県)などがまとめられている。
- (11)——2011年11月3日, 2016年11月26日聞き取り。以下, オオイの置き薬に関する記述は全てこの両日に得た情報に基づいている。
- (12)——この点は既に注(1)の拙稿「東日本大震災と文化資源—宮城県気仙沼市小々汐地区から—」, 173-174頁でも指摘しておいた。

(13) ——かつて、小々汐では病院や農作業に行く際には手こぎの舟をよく用いた。これをカッコブネといい、さらに小さい舟をダンベコと呼んだ。尾形家是对岸の田中前あたりに二反歩の田があり、カッコブネで通って農作業をした。収穫の際は稲の重みで舟が沈みそうになるくらいになった。収穫した稲は小々汐に持って来てハセカ

ケをした。ダンベコは1人～3人乗りで小学生くらいでも漕げるものであった。牡蠣の筏までダンベコで行ってカレイ釣りなどもしたという(前掲注(11)の聞き取りより)。
(14) —— この聞き取りは前掲注(11)に同じ。もちろん、ここでふれられている民間薬の効用は医学的に確認されたものではなく、あくまでも伝承的なものである。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2017年12月18日受付, 2018年6月4日審査終了)

An Obon Altar and a Medicine Chest : Considering “History” from Rescued Cultural Assets

KOIKE Jun'ichi

What potential is held by resources rescued and preserved by cultural asset rescue? This report analyzes this question through museum exhibitions, in particular, exhibitions at the National Museum of Japanese History, and relates the “history” indicated by such resources. Here, resources rescued from the Oi household (Ogata residence) in Kogoshio, Kesennuma City, Miyagi Prefecture and in its vicinity are considered as one case. First, bondana Obon altars are facilities set up temporarily for ancestral rites with the passage of time, but the fact that it is set up in a room inside the house different from the one housing the family Buddhist altar, adjoining the family Shinto altar, is worthy of note. In addition to the *ihai* Buddhist memorial tablet, emblems of ancestral rites not originating in the *jidan* temple–household affiliation system, such as a *chahai* memorial tablet, are displayed. This indicates that the Obon altar is not simply a component of an annual event but its existence is filled with the “history” of ancestral rites of the Oi household. Second, the medicine chest represents the pharmaceutical state of Kogoshio, not only Oi, that they had on hand medicines brought from far away by medicine merchants. Analyzing medicine found at the Ogata residence together with medical traditions of the kind, it can be observed that much information was accumulated for the maintenance of health. Though the information not so much in the consciousness of everyday life, it was contained in the medicine chest and the staircase chest containing it. Reviewing the collected memory with the medicine chest as the axis reveals that the Oi household had played the role of accumulating various knowledge and media related to medicine since premodern times. This indicates that the “history” of the survival strategy of maintaining a healthy daily life was made possible by knowledge related to the medicine chest. This was due to interaction with a large area of the entirety of East Japan, far beyond Kogoshio alone. This indicates that accumulation of information for the survival and maintenance of the household, which could be called the framework for settled life, was a product of “history” supported by the movement of people and information over a long period of time.

Key words: cultural asset rescue, museum exhibition, ancestral rites, medicine merchant, folk medicine